

勝島川端Ⅱ遺跡

事務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

中世以降の主要交通路の南面に当たる勝島地区は、豊かな水と、日本屈指の日照に恵まれる前橋市の中央部に当たり、古くから人々の生活拠点として利用され、特に古墳時代以降は主要な生活・生産域として近年多くの発掘調査において実証され、考古学上数々の成果を収めています。

現今もこの名残を受け、田畑の緑に恵まれた市内有数の農業基盤を主とした経済活動を中心とし、農業生産地としての確たる地位を占めています。

しかしながら、北関東自動車道の建設に伴い、そのアクセス道の整備を始めとし、各交通網の充実・整備に伴い徐々に開発の余波も受け始めてきました。

勝島川端Ⅱ遺跡も、新たに整備された前橋・藤岡線に面した位置に当たり、今後の道路沿線の開発の先駆けとも言える状況下での発掘調査となりました。

調査の結果、古墳時代の住居址6軒を検出し、時期的な相違の見られないことから、限られた範囲からの住居址検出数を勘案すると、この地区には古墳時代前期には大きな集落の存在する可能性が考えられるという、成果をあげることができました。

終わりにりましたが、このように貴重な資料を得ることが出来たのも、開発者株式会社プランニング代表取締役町田庄吉氏の援助と、精力的に調査に従事して下さった関係諸機関と発掘作業員の皆様のおかげによるものと、心からのお礼を申し述べて序といたします。

平成11年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団 長 渡 辺 勝 利

例 言

- 1 本報告書は、都市計画法第29条の規定する民間開発（事務所建設）に伴う磐島川端II遺跡発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地 前橋市磐島町161-5, 9, 12
- 3 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 渡辺勝利）の指導のもとに、開発行為者株式会社ブランニング代表取締役 町田庄吉氏の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役 須永眞弘）が実施した。
調査担当者 古屋秀登・眞塩明男（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
新保一美（スナガ環境測設株式会社）
調査員 権田友寿（スナガ環境測設株式会社）
- 4 調査期間 平成10年12月21日～平成11年1月16日
整理期間 平成11年1月19日～平成11年3月25日
- 5 調査面積 $A=300\text{m}^2$
- 6 出土遺物は前橋市教育委員会が保管する。
- 7 測量・調査計画…須永眞弘、調査担当…新保一美、測量・実測…権田友寿・板垣宏・山口和宏・石田みよ子、写真撮影…新保一美、安全管理・表土掘削…都丸保男、作業事務…須永豊・柴崎信江が担当した。
- 8 本書は、調査団の指導のもと、スナガ環境測設株式会社が作成に当たり、原稿執筆…新保一美、編集…須永眞弘、校正…金子正人、萩野博巳、実測図作成・整理…権田友寿、遺物洗浄…須永豊・柴崎信江、注記…新保一美・柴崎信江、復元…新保一美、遺物実測…佐々木智恵子、内業事務…須永豊が担当した。
- 9 調査に参加した方々（敬称略）
飯島勝彦 石川サワ子 石田みよ子 今井つる 内山恵美子 後藤初治 小林ひろ 関根時太 高橋あき 高橋はる江 都丸藤子 中川住一 根井よし子 長谷川美津江

凡 例

- 1 遺跡の位置の基準
基準点 国土地理院の三角点および水準点 座標系 第IX系
 $A \cdot 0$ 点座標値 $X=39758.000\text{m}$ $Y=-67956.000\text{m}$ 水準点 BM.1=93.00m
- 2 遺跡の位置図
国土地理院発行 2万5千分の1「前橋」を加筆して使用した。
- 3 実測図の縮尺
遺跡平面図 $S=1:200$ （全体図） 遺物実測図 $S=1:2$ 及び $1:4$ を原則とした。
遺構実測図 $S=1:60$ を原則とした。 これら以外の縮尺を使用したときは、その都度表示した。
- 4 遺構の略号は次のとおりである。
古墳時代住居=H ビット（柱穴）=P 土坑=D 溝=W
- 5 土層断面の土色は農林省農水産技術会議事務局 監修 財団法人 日本色彩研究所 色票監修 新版標準土色帖による。

本文中に使用した略号は以下の通りである。

- As-A 1783年降下浅間山起因スコリア・同軽石
As-B 1108年降下浅間山起因スコリア・同軽石
Hr-FP 6世紀中葉降下榛名山起因軽石
As-C 4世紀降下浅間山起因軽石

目 次

序 例 言 凡 例 目 次

I 発掘調査の経緯	2
1 発掘調査に至る経緯	2
2 発掘調査の経過	2
II 発掘調査の概要	2
1 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
2 基本土層	3
III 検出された遺構と遺物	4
1 古墳時代	4
2 平安時代	5
IV まとめ	5

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第5図 H-3・H-4号住居址平面・断面図	8
第2図 標準層位	3	第6図 H-5・H-6号住居址平面・断面図	
第3図 遺構全体平面図 W-1・W-2号溝断面図	6	D-1号土坑平面・断面図	9
第4図 H-1・H-2号住居址平面・断面図 P-1断面図	7	第7図 出土遺物実測図	10

写真図版目次

図版1 遺構写真	11	図版2 遺構・出土遺物写真	12
----------	----	---------------	----

I 発掘調査の経緯

1 発掘調査に至る経緯

平成7年1月31日、地権者より豊島町161-5外における開発行為事前の埋蔵文化財確認調査の依頼が、前橋市教育委員会文化財保護課に提出された。市教育委員会はこれを受け、試掘調査を実施したところ、申請地外縁部から、古墳時代住居址の検出をした。平成10年12月に当該地で事務所を建設するとの連絡があり開発に当たっては、事前に発掘調査が必要となる旨回答した。協議の結果、開発に先立つ記録保存の措置を講ずることとなった。調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施することとなり、同調査団の指導のもとスナガ環境開発株式会社が本調査を受託する、三者契約を締結するに至った。

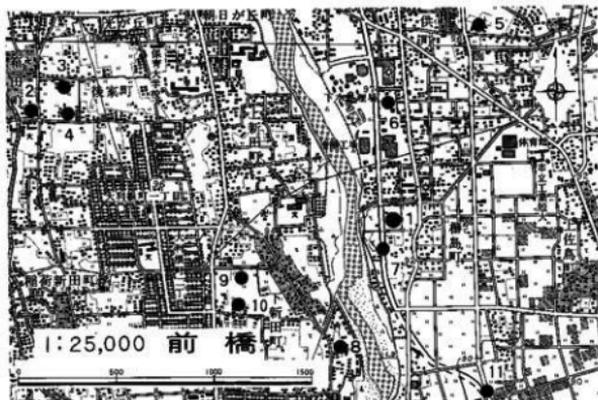
2 発掘調査の経過

平成10年12月21日、発掘調査資材・事務所用プレハブ等を搬入設置し、調査区域内の立木の処理を待って、直ちに表土掘削を開始した。調査区域内には大きな木があったため、プラン確認にはかなりの努力を要したが、遺物の分布範囲から推定し、床面を確認してそれを広げるという手順で調査を行った。しかしながら前述の理由により、明確に壁面を検出することのできない住居址が半数に及んでしまった。与えられた条件から見れば、逆に良く遺構が残っていたとも言える。平成11年1月16日には埋戻し作業が終わり、全作業工程の終了をみた。

II 発掘調査の概要

1 遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡は、JR前橋駅の南方2.7kmにあり、県道前橋・長瀬線に沿う六供町の前橋清掃工場の南300m、同線の東に接する位置にある。地理・地質学的には前橋・高崎台地上にあり、現在はこの道路西側に利根川が南流するが、



- 1 磐島川端II遺跡
- 2 村前遺跡
(平安時代水田跡)
- 3 五反田遺跡
(平安時代水田跡)
- 4 五反田II遺跡
(平安時代水田跡)
- 5 六供下堂木II遺跡
(古墳・平安時代水田跡・古墳時代住居址)
- 6 中大門遺跡
(平安時代水田跡)
- 7 磐島川端遺跡
(古墳時代遺跡・平安水田跡)
- 8 下新田遺跡
(平安時代水田跡)
- 9 下新田中沖遺跡
(平安時代水田跡)
- 10 下新田中沖II遺跡
(平安時代水田跡)
- 11 公田東遺跡
(古墳時代水田跡)

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

表土下1.01mには総社砂層が認められ、対岸の東地区と堆積土層組成を同じくしている。

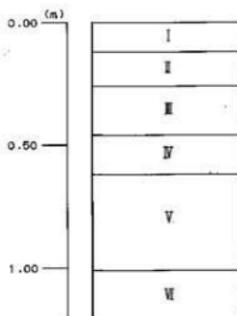
周辺一帯は、南側に東西に走る通称高崎・駒形線を越して優良農地に認定される地域であるため、現状では開発が少ない地域ではあるが、今後の北関東自動車道の完成と共に、大きく様変わりすることも予想される。

前橋台地の組成構造が、火山泥流堆積物とそれを被覆する水性ローム層であり、このことから縄文時代以前の人跡は認めたいものがあった。しかしながら近年の発掘調査において縄文時代草創期の土器片の検出があり、この点に関する再考が迫られてきている。

磐島川端遺跡では弥生時代後半の遺構も確認され、この周辺の土地利用は既にこの時代から始まっていることが想定できる。本遺跡に隣接する道路部分は古墳時代の住居址が存在し、南約100mには方形周溝墓が確認されている。利根変流（かつては広瀬川低地帯を流下したといわれる）以前の地続きであったろう高崎市を含むと、4世紀には既に生産域としてこの一帯が利用されていたものと思われる。このことが周辺古墳の支持母体となり、あるいは糸里制を忍ばせる地名・字名として今に残り、営農の伝統が爾来今日まで続く結果となったものと思われる。

2 基本土層

- I 褐色高締中粘微砂 (表土)
- II 褐色中締弱粘細砂 粗粒As-A3%混入
- III 灰褐色弱締弱粘微砂 As-A1%混入
- IV 灰白色高締弱粘粗砂 (水性二次堆積As-Aスコリア一部酸化により黄褐色化)
- V 暗褐色高締中粘微砂 As-C1%混入
- VI 総社砂層 暗灰色高締弱粘細砂



第2図 標準層位

III 検出された遺構と遺物

1 古墳時代

H-1号住居址

調査区北東隅A-4・5、B-4グリッドに位置する。H-2号住居と重複する。セクションからは本住居址の方が新しい。(形状)長方形か(規模)2.9m×2.7m 確認面からの壁高15cm(面積)8.41㎡(方位)N-4°-W(カマド)未検出。但し北東隅に高さ15cm東西120cm南北60cm程の焼土と粘土の混在する高まりがあった。(柱穴)40cm×35cm×深さ12cm。底部に白色の長方形の安山岩が水平に置かれていた。(貯蔵穴)未検出(壁周溝)無し(床面)As-Cを僅かに混入する暗褐色(標準層位のV層)土まで切り込んでいる。

遺物は、甕、内斜口縁の口唇部が外反する扁平大振りの環(Na22)、外面に深い掘り込みをいれた特殊器台の脚部断片などの他に、3～4点の甕、内面磨きの内斜口縁の埴2点、また当該グリッドとして上げた遺物の中からはミニチュアの埴2点、内面楷描文手捏ね後へら及び櫛状工具による整形の小型環などが出土する。他に混入遺物として灰釉壺片、底部糸切り痕のある軟質陶器片、内耳鍋片がある。

H-2号住居址

H-1号住居址南に接するA-5、B-4・5グリッドに位置する。H-1号住居址と重複する。こちらの方が古い。僅かに床面が下がっているため、重複部分での形状が確認できる。(形状)長方形か(規模)2.9m×3.2m。確認面からの壁高20cm(面積)6.14㎡(方位)N-40°-E(カマド)未検出(柱穴)無し(貯蔵穴)無し(壁周溝)北側のみを確認。(床面)As-Cを僅かに混入する暗褐色(標準層位のV層)土まで切り込んでいる。西よりの大半に粘土が3cm前後に張られ、現状は灰白色小礫状になっている。

遺物は、S字口縁の石田川式甕片、広口壺と広口壺もしくは埴の屈曲部、高环脚部片、3～4点の甕などが出土する。他に須恵器の甕と思われる物(Na60)、鬼高式の坏片や黒曜石片も数点の出土をみる。

H-3号住居址

調査区東壁寄りC・D-4・5グリッドに位置する。(形状)長方形か(規模)3.65m×3.5m。確認面からの壁高15cm(面積)13.57㎡(方位)N-6°-W(カマド)北壁に主軸方向N-1°-Wで全長85cm、甕25cm残存。構築材に粘土を使用したものと思われるが、カクランのため正確には断じられない。(柱穴)無し(貯蔵穴)未確認(壁周溝)無し(床面)粘土が3cm前後に張られ、現状は灰白色小礫状になっている。

遺物は、S字口縁の石田川式甕片3個体分、内面楷描きの高环脚部片及び同身部、6個体分の甕片、環では緩やかに外反する内面へら研磨の体部片。またこの住居西北隅を中心にミニチュアの環Na13、Na24、Na26・32、Na30を始めとする10点(さらに4個体分ほどの同断片)と1/3程残存するミニチュアの埴1個体(他に2～3個体分の断片)を検出している。一括取上げの中には縦位櫛削り後口端部を折りかえし指頭による押圧整形の甕片。また有段口縁の器体や頸目のある小型甕や鬼高式の坏小片も検出された。須恵器では高台埴の一部、同大甕片の体部片、長頸壺の頸部片2個体分が出土している。

H-4号住居址

調査区中央C・D-1・2グリッドに位置する。(形状)南北に長い長方形か(規模)4.8m×3.9m。確認面からの壁高22cm(面積)19.85㎡(方位)N-8°-W(カマド)中心部よりやや南よりに直径1m程の灰と微粒炭化物の拡散範囲を認める。埴とするには確証に乏しい。(柱穴)無し(貯蔵穴)無し(壁周溝)無し(床面)暗黄褐色の粘土塊が小礫状に散っている。おそらくは10cm前後の粘土を主とする貼り床が施されていたものと思うが、大木に囲まれた形の中からの検出のため、正確には断言できない。

遺物は、S字口縁の石田川式甕片3個体分、高环脚部片2点、4～5個体分の甕片、甕底部断片の他に内斜口縁の埴1～3点分、器台と思われる3円窓を持つ脚部片、ミニチュアの坏・埴も各1点出土している。またNa34を初め石製模造品が未完成を含めて5点、材料の滑石断片が他のグリッドから1点出土している。混入遺物として有段口縁や折り返し口縁の甕片や須恵器高台埴の一部、同大甕片、坏・鬼高式の坏(Na28)の一部などが出土する。

H-5号住居址

調査区南東隅D-4・5グリッドに位置する。(形状)長方形か(規模)5.05m×2.6m。確認面からの壁高22cm

(面積) 9.18㎡ (方位) N-67°-E (カマド) 未検出 (柱穴) 無し (貯蔵穴) 無し (壁周溝) 無し (床面) 東よりの一部に粘土が3cm前後に張り、現状は灰白色小礫状になっているのを確認した。

遺物は、S字口縁の石田川式甕片3個体分、高坏身部1点、3~4個体分の甕片がある。内面へら研磨の内斜口縁となる塊1~2個体分やミニチュアの坏・埴の他小型の埴と思われる断片も各1点出土している。

混入遺物としては、須恵器では塊断片、大甕体部片の他、表面一括として内面へら研磨を施した埴、120°程に外反する内耳鍋片を検出している。

H-6号住居址

調査区中央B-2・3、C-2・3グリッドに位置する。(形状) 不明 (規模) 不定。確認面からの壁高20~25cm (面積・方位) 確定不能 (カマド) 無し (柱穴) 無し (貯蔵穴) 無し (壁周溝) 無し (床面) 貼り床はなく、As-Cの混入した土層 (V層) 上面まで掘り下げても、安定した床面の確認に至らなかった。

遺物は、S字口縁の石田川式甕片4~5個体分、4~5個体分の甕片、高坏断片2~3点がある。また赤色塗彩の施された内・外面へら研磨3円窓の脚を持つ器台 (No2)。内斜口縁となる埴3個体分 (うち1点はへら研磨)。ミニチュアの坏4点・同埴断片も各1点出土している。

D-1号土坑

B-1・2グリッドに位置する。長径92cm×短径78cm。深さ35cm。南北に長いやや楕円形を呈す。手握ねの土器 (D-1 No1) や石田川式土器片を検出する。その用途・目的は不明である。

2 平安時代

W-1号溝

A-4グリッドからD-3グリッドラインにかけて、ほぼ南北に緩やかに北流する。上端46cm、下端21cm、深さ平均38cm。確認面で北端はAs-Bスコリアがほぼ全幅を覆うが、南端では水性二次堆積のAs-Bスコリアが灰黒色の鉄分凝縮層とのラミナを形成する。最下層にも水性堆積のAs-Bスコリアが存在し、遺物は石田川式のS字口縁の破片や古墳時代の甕片等も検出されるが、覆土の状況や1/2残存のカワラケ灯明皿や内耳鍋の破片等から中世の遺構であり、As-Bスコリア降下直後に短時間に埋まったと考えるのが妥当であろう。

W-2号溝

A-0グリッドからE-1グリッドにかけて、これも緩やかに北流する。上端40cm、下端32cm、深さ23cm。この溝の出土遺物もW-1号溝と大差ない物が主である。しかしながら底部に近い埋め土はAs-Bスコリア・As-Bが明確であり、W-1号溝と同時期の溝といえよう。遺構確認面で認められるAs-Aスコリア・As-Aは、天明三年の記番の強さを証明する縦位の不整合と見なすことが出来、遺構確認面の上層がやや酸化したAs-Aスコリアを含む暗黄色砂質土となっている。

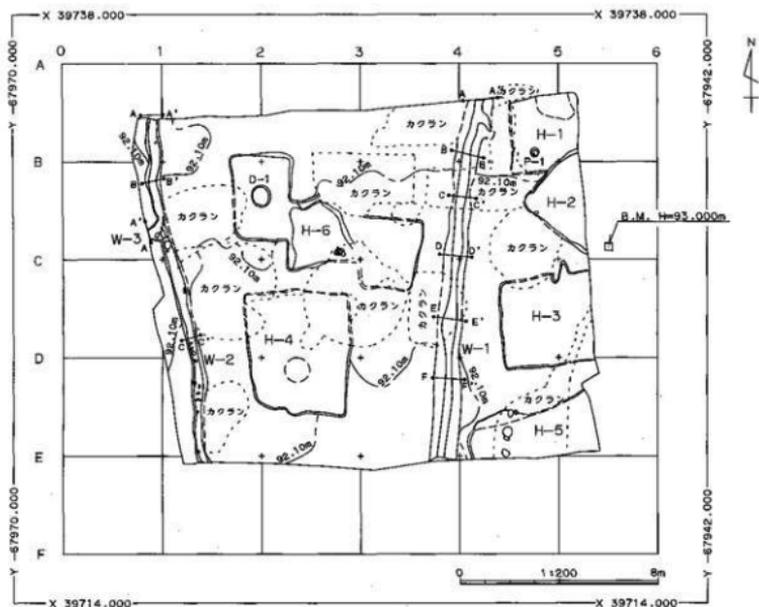
W-3号溝

B-0グリッドでW-2号溝に直交するように分かれるが、すぐに調査区外になってしまうため、単純にW-2号溝と同時期・同目的としてしかとらえられない。上端51cm、下端32cm、深さ26cmを測る。

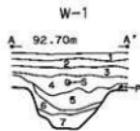
IV まとめ

調査区域内は、海抜92.1mを計るほぼ平坦な地形となっている。隣接する道路部分の調査においても、この周辺が居住区となる事実は判明している。過去の調査例からすると、市立七中の北東側に続く北西から南東にかけての斜めラインが居住区となる感が強い。総社砂層を中心に、その有無や海抜差等の考察により今後生産域との論拠が明確にされることを期待するものである。

H-3号住居址の北西隅を中心に、手握ね型整形ミニチュア土器が大量に出土した。またH-4号住居址を中心に滑石製の石製模造品が出土している。この中には未完成のものも含まれる。したがって当初、祭祀製品の工房かと思われたが、ミニチュアの坏や埴の中には二次焼成品の顕著なものが半数を占めることなどから、この地が祭祀の場であったことが想定される。南約100mに位置する方形周溝墓との直接的関係は薄いものと考えられる。時期・方位を考えると噴火中の標名山との関連も無視できないものがある。



- W-2①セクション柱状 A-A'
- 1 褐色中硬砂質砂
 - 2 褐色中硬砂質砂 粘土As-A3%
 - 3 褐色中硬砂質砂 粘土As-A3%
 - 4 30%灰白色砂質As-Aスコリア10%混入
 - 5 褐色中硬砂質砂 As-A7%
 - 6 灰白色中硬砂質砂 粘土As-Aスコリア
 - 7 灰白色砂質As-Bスコリア 一部褐色を帯び
 - 8 褐色中硬砂質砂 H-PP3%
 - 9 灰白色中硬砂質砂 (混)
 - 10 褐色中硬砂質砂
 - 11 灰褐色中硬砂質砂 As-B1%
- 図説による特色



- W-1①セクション柱状 A-A'
- 1 褐色中硬砂質砂 As-B7%
 - 2 褐色中硬砂質砂 As-B1%
 - 3 褐色中硬砂質砂 As-B1%
 - 4 灰褐色中硬砂質砂 As-Bスコリア7%
 - 5 灰白色中硬砂質砂 粘土二次堆積As-Bスコリア (砂の混入あり)
 - 6 20%褐色中硬砂質砂混入
 - 7 褐色中硬砂質砂 As-Bスコリアに褐色中硬砂質砂の混入



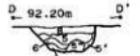
- W-1②セクション柱状 B-B'
- 1 褐色中硬砂質砂 As-B10%混入
 - 2 褐色中硬砂質砂 As-Bスコリア混入
 - 3 褐色中硬砂質砂 As-Aスコリア7%混入



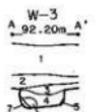
- W-1③セクション柱状 C-C'
- 1 同上



- W-2②セクション柱状 C-C'
- 1 褐色中硬砂質砂 As-A3%
 - 2 褐色中硬砂質砂 H-PP3%
 - 3 褐色中硬砂質砂 粘土As-B5%混入
 - 4 灰白色中硬砂質砂 1と2の混



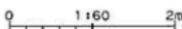
- W-1④セクション柱状 D-D'
- 1 同上



- W-1⑤セクション柱状 A-A'
- 1 同上 褐色中硬砂質砂 As-A3%混入 下部は図本組の不整合面
 - 2 褐色中硬砂質砂 As-Aスコリア7%混入
 - 3 灰白色中硬砂質砂 As-Aスコリア7%混入
 - 4 褐色中硬砂質砂 コロイド混入 粘土As-A3%混入
 - 5 灰褐色中硬砂質砂 褐色As-A3%混入
 - 6 褐色中硬砂質砂 コロイド混入 粘土As-A3%混入
 - 7 灰褐色中硬砂質砂 As-B7%混入



- W-1⑥セクション柱状 B-B'
- 1 同上
 - 2 As-A混入割合中硬砂質砂約7%
 - 3 As-A混入 (As-Aスコリア)
- W-1⑦セクション柱状 F-F'
- 10 灰白色中硬砂質砂 粘土二次堆積のAs-BスコリアとAs-B3%
 - 11 灰白色中硬砂質砂 粘土二次堆積のAs-BスコリアとAs-B1%
 - 12 褐色中硬砂質砂 As-C混入

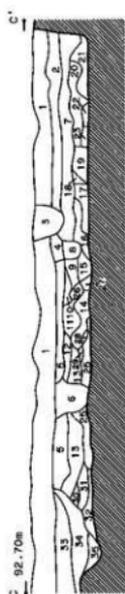
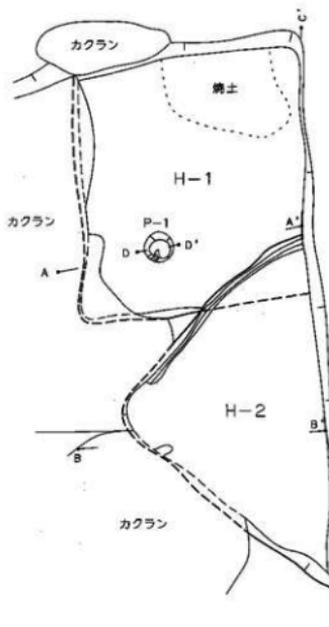


第3図 遺構全体平面図 W-1・W-2号溝断面図



H-1セクション往観 A-A'

- 1 灰白色粘砂質砂
- 2 褐色粘砂質砂
- 3 灰白色粘砂質砂
- 4 褐色粘砂質砂
- 5 褐色粘砂質砂
- 6 褐色粘砂質砂
- 7 褐色粘砂質砂
- 8 褐色粘砂質砂



H-1・H-2セクション往観 C-C'

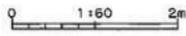
- 1 灰土 下層 5cmほど厚さの硬砂層
- 2 褐色粘砂質砂
- 3 ナガタン
- 4 灰褐色粘砂質砂
- 5 灰褐色粘砂質砂
- 6 灰褐色粘砂質砂
- 7 灰褐色粘砂質砂
- 8 灰褐色粘砂質砂
- 9 灰褐色粘砂質砂
- 10 灰褐色粘砂質砂
- 11 灰褐色粘砂質砂
- 12 灰褐色粘砂質砂
- 13 灰褐色粘砂質砂
- 14 灰褐色粘砂質砂
- 15 灰褐色粘砂質砂
- 16 灰褐色粘砂質砂
- 17 灰褐色粘砂質砂
- 18 灰褐色粘砂質砂
- 19 灰褐色粘砂質砂
- 20 灰褐色粘砂質砂
- 21 灰褐色粘砂質砂
- 22 灰褐色粘砂質砂
- 23 灰褐色粘砂質砂
- 24 灰褐色粘砂質砂
- 25 灰褐色粘砂質砂
- 26 灰褐色粘砂質砂
- 27 灰褐色粘砂質砂
- 28 灰褐色粘砂質砂
- 29 灰褐色粘砂質砂
- 30 灰褐色粘砂質砂
- 31 灰褐色粘砂質砂
- 32 灰褐色粘砂質砂
- 33 灰褐色粘砂質砂
- 34 灰褐色粘砂質砂
- 35 灰褐色粘砂質砂



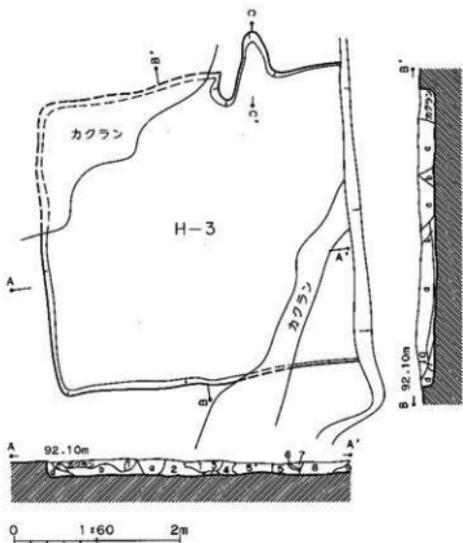
- 1 灰褐色粘砂質砂
- 2 灰褐色粘砂質砂
- 3 灰褐色粘砂質砂
- 4 灰褐色粘砂質砂
- 5 灰褐色粘砂質砂
- 6 灰褐色粘砂質砂
- 7 灰褐色粘砂質砂
- 8 灰褐色粘砂質砂
- 9 灰褐色粘砂質砂
- 10 灰褐色粘砂質砂
- 11 灰褐色粘砂質砂



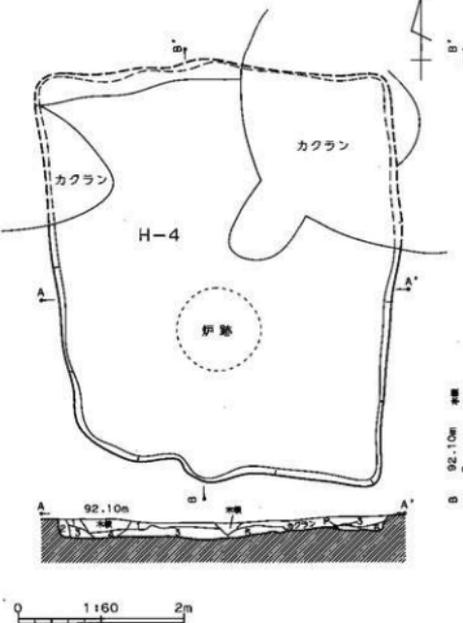
- H-1 P-1セクション
- 1 灰褐色粘砂質砂
 - 2 褐色粘砂質砂
 - 3 褐色粘砂質砂



第4図 H-1・H-2号住居址平面・断面図 P-1断面図

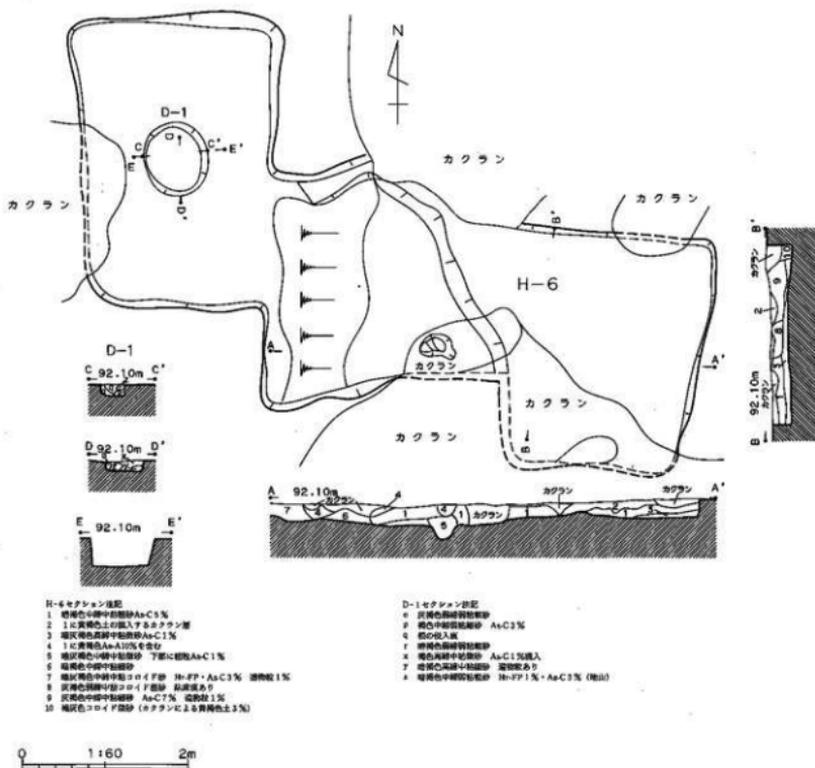
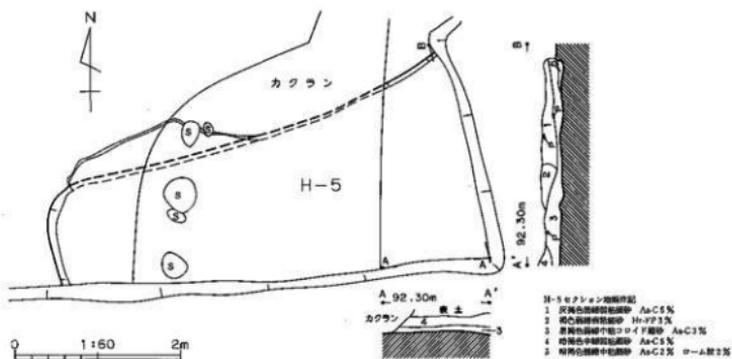


- H-3セクション付記
- 1 赤褐色土中層中粒層砂 積の侵入層
 - 2 暗褐色土中層中粒層砂 Aa-C1% 積
 - 3 黄褐色土中層中粒層砂 Aa-C1% 積
 - 4 3.5%の砂
 - 5 黄褐色土中層中粒層砂 ローム混入 7%
 - 6 5%の積の侵入層
 - 7 赤褐色土中層中粒層砂 (積)
 - 8 暗褐色土中層中粒層砂 (赤土二次堆積Aa-Bスコリア) 積層物混入・Aa-B&C
 - 9 黄褐色土中層中粒層砂 (赤土二次堆積Aa-Bスコリア)
 - 10 暗褐色土中層中粒層砂 Aa-B2% 積
 - 11 暗褐色土中層中粒層砂 Aa-C1% (積)
 - 12 赤褐色土中層中粒層砂 Aa-C3% 積
 - 13 暗褐色土中層中粒層砂 H-PP2% 積
 - 14 暗褐色土中層中粒層砂 Aa-C3% 積
- 地山 黄褐色土中層中粒層砂 Aa-C3%

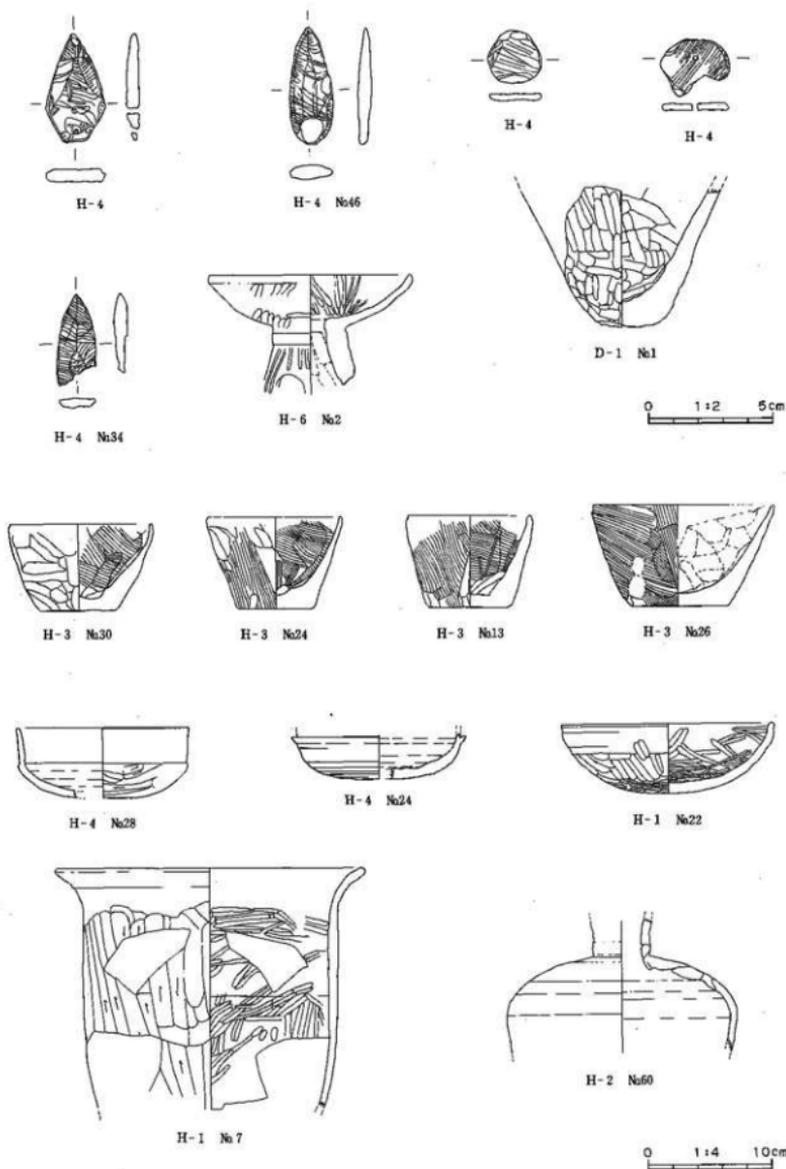


- H-4セクション付記
- 1 黄褐色土中層中粒層砂 ローム混入 (赤土二次堆積Aa-A10%)
 - 2 暗褐色土中層中粒層砂 H-PP2% 積
 - 3 暗褐色土中層中粒層砂 Aa-C3% 積
 - 4 暗褐色土中層中粒層砂 Aa-C3%混入 (積の侵入)
 - 5 暗褐色土中層中粒層砂
 - 6 暗褐色土中層中粒層砂
 - 7 暗褐色土中層中粒層砂
 - 8 T1ロームブロック混入

第5図 H-3・H-4号住居長平面・断面図



第6図 H-5・H-6号住居址平面・断面図 D-1号土坑平面・断面図



第7图 出土器物实例图



遺跡全景 (南から)



H-1号住居址完圖 (南から)



H-2号住居址完圖 (北西から)



H-1号住居址ピット完圖 (南から)



H-3号住居址完圖 (北から)



H-4号住居址完圖 (南から)



H-5号住居址完圖 (北から)



H-6号住居址完圖 (北から)



W-1号溝完圖 (南から)



W-2号溝完圖 (南から)



H-1 No7 瓶



ミニチュア坏群



H-4 No24



滑石製模造品



高坏身部



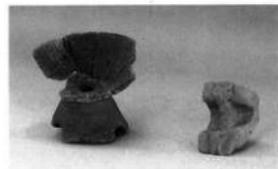
H-1 No22



高坏脚部



H-4 No28



器台H-6 No2 特殊器台脚部



H-2 No60 平瓶



D-1 No21 ミニチュア坏

図版2 遺構・出土遺物写真

抄 録

フリガナ	ヌデシマカワバタニイセキ
書名	勝島川端II遺跡
副書名	民間開発（事務所建設）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ	
編著者名	新保一美（スナガ環境測設株式会社）
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664番地の4
発行年月日	西暦1999年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ヌデシマカワバタニイセキ 勝島川端II遺跡	ヌデシマカワバタニイセキ 前橋市勝島町161-5 外	10201	10G33	36°21'20"	139°04'33"	19981221 19990116	300m ²	事務所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
勝島川端II遺跡	住居址	古墳時代前期	住居址6軒	石田川式土器片・手捏ね形土器・須恵器等
勝島川端II遺跡	土坑	古墳時代前期	土坑1基	石田川式土器片・手捏ね形土器等
勝島川端II遺跡	溝址	平安時代	溝址3条	石田川式土器片・土師器片・カワラク等

 勝島川端II遺跡

1999年 3月25日 印刷

1999年 3月31日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664番地の4編集 スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町211番地の1